

# せとうち備讃諸島真鍋島における体験型交流の拠点としての 商業施設・広場・港の設計

高知工科大学 システム工学群 建築・都市デザイン専攻

武田 尚真

指導教員 重山 陽一郎

## 1. 背景

岡山県笠岡市真鍋島は古くから海上交通の要衝として栄え、明治以降は漁業最盛期を迎え、ほぼ一年を通じて漁を行い漁村として発展した。古くからの漁村風景が残っており、昭和53年には「ふるさと村」に選定されている。また、以前は島のあらゆる土地を耕し、山の頂上まで耕地としており、温暖な気候を利用した花卉栽培が盛んで「花の島」とも呼ばれていた。

## 2. 課題

### 1) 高齢化、人口減少による農業、漁業の衰退

現在真鍋島は高齢化、人口減少により漁業従事者や農家の数が減少している。また、以前は山の斜面を用いた耕作地だった場所に草木が生い茂り耕作放棄地となっており、以前のような漁業、農業の文化は衰退している。

### 2) 島に交流、休憩できる場所がない

真鍋島には豊富な自然資産や漁業、斜面栽培などの文化があるがこれを活かし交流する場所はなく、島に滞在中休憩する場所は多くない。これでは観光客に長時間滞在してもらうことは難しい。

## 3. 目的

真鍋島の豊富な自然資産や文化を活かし、体験型交流を通じて地元住民と観光客がにぎわえる空間づくりをすることで、自然資産や文化を継承・再生し、真鍋島の新たな観光拠点とする。

## 4. 対象敷地

対象敷地は真鍋島中央部の図1の点線で示す範囲である。船乗り場の東にある、埋立地と山に挟まれた場所である。敷地の中の山道は島の反対側に行ける唯一の道であり、斜面栽培の際に用いられていた。山道の

途中からは港が一望でき、観光客がよく写真を撮りに訪れる場所となっている。また、敷地内の埋立地には倉庫やベンチなどが置かれており、地元の漁師さんが仕事の際に集まる場所となっている。このように対象敷地は漁業と農業の要素を含み、地元住民と観光客の両方が滞在する場所となっている。(図1)



図1. 対象敷地とその周辺  
(国土地理院地図に筆者加筆)

しかし、住宅が道路ぎりぎりまで迫り圧迫感があり、高さ約90cmの防波堤が海への視界を遮ることで観光客が長時間滞在したり、地元住民が日常的に訪れる空間にはなっておらず交流が生まれにくくなっている(図2)。また、山道の入り口からは建物が海への動線を遮り海側と山側の関係性が遮断されている。



図2. 車道から北東を向く

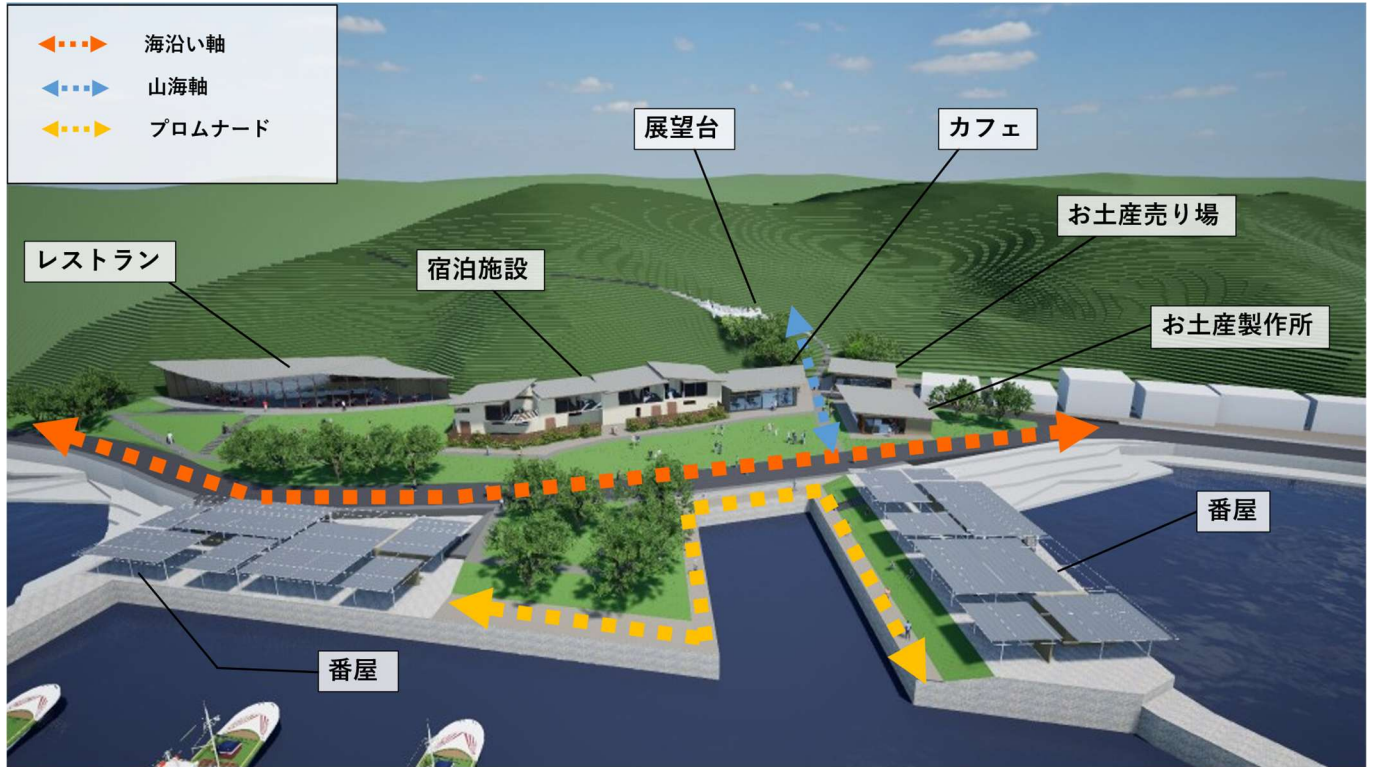


図3 完成予想パース

## 5. 設計方針

### 1) 自然資産・文化を活用した体験型施設の建設

地元住民と観光客が体験型交流を行う拠点として以下の3つを設ける。

- ・ブルーツーリズム (漁業体験・魚裁き体験) ⇒ 番屋
- ・アグリツーリズム (農業体験・料理体験) ⇒ レストラン
- ・お土産製作体験 (地域の方とお土産製作) ⇒ お土産製作所

3つの施設にはそれぞれ地元住民と観光客が一緒に調理、加工できるスペースを設け、交流を行うことで文化再生を促す。また、ブルーツーリズムやアグリツーリズムは日帰りだけでなく、長期滞在も目的としているため宿泊施設を設ける。

### 2) 海沿い軸、山海軸と、動線上の拠点整備

敷地内に海沿い軸、山海軸を設け、歩行者の主な導線とし、体験型施設を配置する。

海沿い軸は道路を堤防の高さと同じにすることで海側への遮蔽物がなくなり、視界が開け海沿いを移動中に気持ちいい空間として整備する。

山海軸については、現状では山側と海側が分断

されているため、山海軸として新たに歩道を整備することで、山側と海側をつなぎ、にぎわいを感じることが出来るようにする。また、山海軸の歩道は将来的な斜面栽培において、地元住民や農業体験者が山へ向かう際や、収穫された野菜をレストランへ運ぶ動線として整備する。

港の汀線の延長線上と山海軸の交差部に対象敷地全体を俯瞰できる展望台を設けることで、山側に軸を延長し、観光客を山側に誘導する。これらにより、地元住民と観光客の偶発的な交流を促す。

## 6. 設計

### a) 海沿い軸の空間

海沿い軸として既存の車道沿いに広場や樹木を配置し、歩いて気持ちいい空間にすることで観光客だけでなく、地元住民の方も日常的に訪れる場所とする。道



図4 図2と同じ位置から北東を向く

## 卒業設計概要

路を防波堤の高さと同じレベルで整備し、道路沿いの建物をセットバックさせ海側、山側の両方に視線が抜けるようにすることで海側、山側が一体的な空間となる(図4)。

### b)山海軸の空間

山海軸上にカフェ、お土産売り場、お土産製作所を配置し、その先には番屋を設けることで、山から海まで連続して多くの方が滞在できる施設を設ける。それにより、奥行きを生み、視線や導線を海側まで誘導することで観光客、体験者と地元住民との交流を促す(図5)。

番屋、お土産製作所は車道、歩道の二つの軸が重なる位置に配置することで体験者や観光客と地元住民の様々な形での交流を促す(図3)。



図5 山道入口から海を望む

### c) お土産製作所、お土産売り場

このお土産製作所で製作体験を行う。歩道に向けて体験スペースのファサードを設けることで通行している人から体験している様子を見学できる。製作したものなどをお土産売り場で販売する。(図6)



図6 お土産製作所、お土産売り場外観

### d)番屋

この番屋でブルーツーリズムを行う。番屋はルーフをかけ半屋外空間を作ることのできる空間とする。芝生の斜面、プロムナードと合わせ一体的に整備することで様々な人が海辺の空間に滞在し交流を促す(図7)。



図7 番屋外観

番屋の反対側にも広場、プロムナードを設けることで、海辺に散歩に来た方などと漁業体験者が互いに見えて互いににぎわいを感じることが出来る(図8)。



図8 番屋からの眺め

番屋をプロムナードに並行に配置することで、広場やカフェから海への眺めが開け、にぎわいを感じることが出来る(図3)。また、カフェ前の広場は人が多く滞在する空間なので樹木などは設けず移動や運動のしやすい開けた広場とした(図9)。



図9 カフェからの眺め

### e)レストラン前の空間

レストラン前の広場には高さ3mの盛り土をすることで、前方に約20%の斜面を作る。これにより、斜面で腰かけたり寝転んだりできるようにし、落ち着いた雰囲気での休憩、交流できる空間とした。島には高齢者が多く車いす利用者もいることも考慮し、丘の東側にスロープを設置し、すべての方にレストランを利用してもらえるようにした。丘の上のレストランは下から見上げることが多い施設であるためシンプルな陸屋根ではなく波形の屋根にすることで空間に変化や流れを与え、長時間滞在でも飽きにくい広場とした(図10)。



図10 レストラン前広場

#### f) レストラン

このレストランでアグリツーリズムを行う。現状ではこの場所からは高さ約 1.8m の防波堤により海は見えないが、道路の改善と丘の生成で海が見えるようになる。扇形の地形を活かし海に向かって客席や料理体験者のためのキッチンを設置し、前方に大開口を設けることで、海がよく見える開放的な空間で料理体験や食事ができる(図 11)。



図11 レストランから海を望む

また、視線や意識が集中する扇形の中央に料理体験者のためのキッチンを設置し、食事中の方の意識を料理体験者にも誘導することで両者に関係性が生まれ客席とキッチンが別の空間ではなく、一つの空間としてにぎわえるようにし、外への開放性と中心への求心性をもつ施設とする(図 12)。

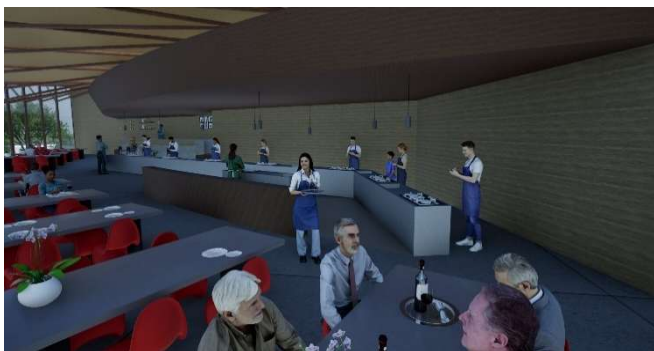


図12 レストラン内観

#### g)展望台

山道途中のこの場所には、観光客がよく写真を撮りに訪れる。現状では単なる通路でしかない。そこで展望台を設けることで多くの人々が滞在できる空間とする。また、明確な目的地を作ることで観光客を山側へ誘導し、農作業を終えた地元住民や観光客との交流を促す。

展望台は、床を全面に張らずに通路状にすることで中央部の床材を省き、必要最低限の材料で施工できる。また、平面的に配置すると山側の出口が斜面により行き止まりとなるため出入りに階段を設けることで山道と展望台をつなぎ一周回遊することが出来る(図 13)。また、展望台からは港だけでなく、斜面栽培の様子も眺めることが出来る。

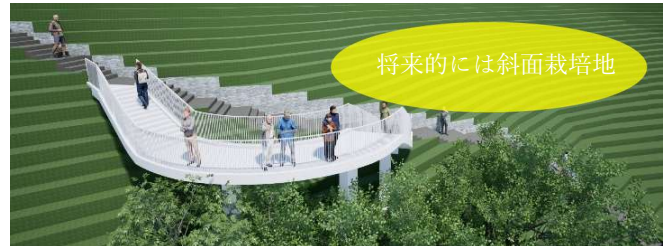


図13 展望台俯瞰パース



図14 展望台から港を望む

#### h)宿泊施設

現状では、観光客は日帰りが多いが宿泊施設を設けることでブルーツーリズムやアグリツーリズムでの長期滞在を促す。宿泊施設の前に多くの人でにぎわう広場があるためメゾネットタイプとし、一階には風呂やトイレ、二階にはリビングを配置することでプライバシーの確保だけでなくリビングから広場や海辺への眺めが開心地良い空間で宿泊してもらえるようにした(図 15)。



図15 宿泊施設外観

#### 参考文献

- 1)真鍋島 | またたび笠岡。[笠岡市観光協会]  
<https://www.kasaoka-kankou.jp/island/manabeshima>
- 2)浦上琢磨・景観デザイン研究室(2023)「鞆の浦、瀬戸内海を俯瞰する展望台の設計」